

●地域環境学ネットワークの準備状況

- ・ 3月に設立を宣言。規約、会員名簿を用意。
- ・ 九州はメンバーがいない。島谷幸宏さん（アザメの瀬／全国的フィールド）、清野聡子さん、鎌田先生からの紹介
- ・ エゾジカ協会から3名参加予定。
- ・ 四季工房は最近の目玉。地域リーダーとして地域のライフスタイルを提案する企業。
- ・ 黒潮実感センターの神田さんもレジデント型研究者のお手本のような人。
- ・ 須藤さんはカワウ管理の技術を持つ人。行政にも地域にも頼りにされている。しかも商売としてやっている。
- ・ みなみから届ける環づくり会議は鎌田先生経由で。
- ・ 虹別コロカムイの会は研究者を頼りにせず自分たちでシマフクロウの森づくりをしている。ドナルドソン・トラウトの種苗を保存していることでネットワークが国際的に広がっている。
- ・ 奄美の菌さんはアマミノクロウサギの自然の権利訴訟をやった人。クロウサギに地域の声を代弁させる。
- ・ 釧路湿原に少しでもかかわることは内田さんのところに情報が集まってくる
- ・ 関東圏にないが、宇都宮大学は可能性はある。
- ・ 地域性は気にしすぎない。

●地域環境学ネットワークの準備状況

- ・ ステークホルダーの中に「科学研究（知識生産）に取り組むステークホルダー」というくくりが生まれた。コロカムイの会もここに入る。
- ・ 個別課題のネットワークに撤退の農村計画も入る。地球研メンバーによる地域環境情報ネットワークという試みもある。どんなもんか？彼らにはステークホルダーの観点はない。
- ・ 地域ごとにネットワークがあることも相変わらず認識する。
- ・ それぞれ相またがる。一人の人がいろいろな側面を持つ。
- ・ 協働のあり方を探索する→ガイドラインへ。参加型研究評価システムも並行してやっていないといけない。
 - Web ジャーナルに投稿するにはステークホルダー向けの要約を用意するとか。地域の人が査読する。→ 今、大学は市民にどう評価されているかも考えなければいけなくなっている。
 - 表彰、認証制度。
- ・ 研究成果が問題解決への貢献度によって評価される → 今までは評価する方法がなかった。あるいは暗黙の評価だった。
- ・ 地域の人が投稿するのもあり。研究者と一緒に投稿する？
- ・ 地域の人にとってのメリットは？→ ウェブジャーナルは研究者向け。
- ・ 設立発起人には何を期待するか？ → 声のかけ方を検討。こちらの意図がはっきり伝わるような方

を推薦してほしい。微妙なラインの人はけっこういる。どこかの地域に本気でかかわっている、かかわり続けてきた人。

- ・ ここで重視する知識のベースがある。自分の研究のために地域を使っているのではだめ。
- ・ 水産庁の…コンテスト？ → 水産関係の人はすごい人がいっぱいいる。バランスを考えないとけない。水産関係で声をかけたいのは松田泰明さん。研究者を使うステークホルダー。漁協に入ってるが環境教育に注力。
- ・ 研究者主導型で始まっている。設立後はステークホルダーを増やしたい。話に乗ってくれそうなステークホルダーを探す。
- ・ 上勝ではキョロロと勝手に交流してる。そういうのが地域にとっては役にたつ。→ そういう情報を得られるネットワーク。
- ・ 「協働のガイドライン」は協働の内実を探っていく。よりよい協働を導くためのガイドライン。今は研究者とステークホルダーと便宜的に分けているけど、いろんなステークホルダーがいる。
- ・ 問題意識として、知識の生産と流通をだれがどうやるかということは根幹にある。いろんな知識生産主体がこれだけ集まっているネットワークは、知識生産しないステークホルダーも食える。一般的な地域づくりに取り組むステークホルダーにとっては特別なインセンティブはない。
- ・ ステークホルダー向けの要約は、実際にはかなり難しそうだが、イメージが重要。
- ・ ステークホルダーの人の経験を表現する場所をつくる。→ 地域情報環境ネットワークとは全然違う。組織同士のネットワークをつくるらしい。
- ・ 地域の主体は、個別の経験を読み取る力を持っていて、飛び越える。森の健康診断の人が、土佐の森救援隊をみてすぐに取り入れる。創発的に動いていく。
- ・ ハブになっている個人に入ってもらいたい。ハブとしては、地域をマネジメントするスキルを求められている。われわれはそういうスキルをステークホルダーから学びたい。
- ・ 経験を言語化するのが難しい。文体の開発、創発ができそう。
- ・ ステークホルダーのネットワークができることは最終的な目標の1つ。それぞれの地域が交流し合う。研究者がまずつながっておくことで、彼らとかかわりの深いステークホルダーとつながる。
- ・ 研究者がステークホルダー化することも

●スケジュール・参加主体

- ・ 2010年度、短期滞在型研究をやってみたい。院生を3ヶ月くらいネットワークの地域に派遣。参加型研究評価の試行も。
- ・ みなみから届ける環づくり会議はそれぞれの企業が発意をしてという感じのものではないので、地域企業の個別ネットワークという感じが強い。
- ・ 三井物産は中身に踏み込んでいる。一緒にやる。金沢支店が仕切る。→お金を出すだけのCSRは古い!?
- ・ 恩納村漁協も経済活動をしている。企業とは違う意思決定スタイルだが。境港のイゲタさん？

●地域環境学ネットワーク参加のインセンティブ

- ・ ガイドラインは、「飼いならせ」ではなく、飼いならしたらこんないいことがある、という言い方。

ふるいにかける。科学者・専門家を選択する。→コーディネーターには必要。選択眼を養う。地域によりマッチする人を選択する。See.ミドルマン（地域内で）

- 研究者の注意事項は、ステークホルダーにとっては研究者を使いやすくなる。そういうものがあるとはっきり断れる。 ← 仕事としてやっているのに対応しないとイケないのだが、何て失礼な!!という人もいる。そのせいで他の研究者にもあたってしまう。
- 地域の人への研究者に対する目を変える。 ← しくみとして。
- 「多様な専門性」もう少しわかりやすく言いたい。大学研究者の専門性だけではないということ。一人の研究者でカバーできることではない。
- ステークホルダーがまずは寄ってくる研究者をいじめてみるということはある。それでも食いついてくる奴とは付き合ってる。
- 家中さんは文章を書いてもずく販売に貢献しているからまあ歓迎してもらっているけど、「いつも忙しい」といわれる→ 活動の意義を社会に発信するという研究者の役割もある。比嘉さんは議論を楽しんでいるところもある。
- ガイドラインは、個人的な経験や直感に頼らずに、歓迎される研究者の姿を示す
- 役に立つ研究者の姿はたくさんある。
- 矢作川の洲崎さんでも、これだけやっているのに一切評価されていないとポロリと言う。→ アウトプットの先が複数あったほうがいい。
- **Ecology & Society** はアメリカ生態学会がジャーナル名を変えたもの。日本でもありうる。
- 現場の知識生産主体にとっては、科学的基盤の強化が可能。地域の経営戦略を作れる。
→競合する？ 普及してもいいという人が入ってくる。
- 市民調査にも幅がある。いろいろな幅をとらえられる。 ←研究者の下働きとしての市民調査ではない

●規約案

- 第2条目的
 - 科学者・専門家とまったく縁をもたない地域づくりは入ってこない。縁を持つポテンシャルはあるが。知識生産をめぐる。科学者・専門家は地域づくりに必須と言いたい勢い。
 - 生産的な協働=productive。建設的？
 - 「…研究活動を行う」研究主体=科学者だけではない
 - 知識生産をつうじた、建設的な協働。
- 会員
 - 運営委員の推薦を受け、運営会議で承認。運営委員は当面プロジェクトメンバ。
 - 会員になりたい！という人は、運営委員と交渉して。運営委員はまったく知らない人を推薦しない。知らない場合は会いに行く。責任の主体は運営委員。
- 何年後に改訂かは様子見。
- 第7条代表
 - ボスじゃない。フィロソフィーを揺るがないようにする。「環投げの心棒」
- 第8条運営会議

- ▶ 会議はバーチャルでも。
- 第12条会計
 - ▶ 活動にかかわる費用は自己負担。会費は当面とらない。
- 第13条総会
 - ▶ 運営委員の選出のみが審議事項。
 - ▶ シンポジウムと同時開催。第1回シンポジウムの際に総会。飲みながら！？
 - ▶ 予算・決算報告（今は予算ないのでゼロ）
 - ▶ 運営委員の活動に対する評価をする。

→社会通念上はが、参加者に通用するか？？進行が遅れるのは避けたい。
運営会議が運営主体であり、会員はサービスを受け、意見を出す。

●ウェブサイト

- 設立発起人リストは、会員リストに移行。
- 地図におとした
- フォーラムへの書き込みをメールで知らせる機能を。
- イベント紹介投稿は公開希望の場合事務局が承認して公開も。
- クローズドな会員ページに乗せる情報=会員になったから得られる情報を得られること、信頼できる情報を得られる。
- 紙媒体でのコミュニケーションも考えていかないといけない。ウェブコミュニケーションしていない人もいる。

●設立シンポジウム

- 2010年9月18・19日
- 200人規模。あつめる！
- 会員＋一般公開
- 1日目：PM 基調講演（佐藤）、シンポ＋パネル→知識生産（新妻、松田、比嘉、井田、四季工房？）
- 2日目：AM 総会、ポスターセッション PM シンポ＋パネル→ネットワーク（鎌田、丹羽、上村、神田、内田、鹿熊）
- 本にしよう！
- 設立時頃に予定者には声かけする。
- 協働のガイドラインはお披露目する。基調講演はガイドラインの趣旨、キーコンセプトを語る。
- 趣旨に賛同する若手研究者を積極的に会員にしよう。ただの研究発表の機会ではないということさえ理解していれば。 周知をがんばる。
- 国外の日本人研究者でも関心ある人は多いはず。特に途上国でやっている人とか。

●JST-RISTEX 国際シンポジウム

- 8月24日@東京
- M. Crosby 氏。海洋生物学、comanagement as new paradigm を提唱。 →科学的知識をいかに

transfer するかという視点。ステークホルダーからの input は彼に対しても new なテーマ。